

県立図書館だより

平成24年6月

青森県立図書館報 第13号

青森県立図書館の団体見学について

青森県立図書館では、学校等の団体見学を受け付けています。

毎年、県内各地の幼稚園・保育所・学校から多くの幼児・児童・生徒が図書館見学に来館します。

一般の利用者が入ることができない書庫等を見学することで、本がどのように管理・保管されているかを知ることができます。図書館をより身近に感じることができます。

また、御要望に応じて、図書館2階にある青森県近代文学館を中心に見学するようにしたり、見学の最後に読み聞かせを行うこともできます。

近年では、学校だけではなく、一般の団体の見学もあり、今まで知らなかった図書館の役割やサービスを知るきっかけとなっています。



団体での見学を希望される場合は、日程の調整と「見学等利用申込書」の提出が必要です。詳しくは、青森県立図書館企画支援課（TEL：017-739-1456）に御連絡いただくか、青森県立図書館ホームページ（http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/to/p/guid/gaku_riyou.html）をご覧ください。

目 次

青森県立図書館の団体見学について.....	1
今月の作家コーナー.....	2
こんなレファレンスがありました.....	3～4
子どもの本の紹介.....	5
郷土資料の紹介.....	6
近代文学館資料の紹介.....	7
カウンターから一言.....	8

今月の作家コーナー 常設展示室の月替わり展示

青森県近代文学館では、平成 22 年 7 月から、常設展示室で、毎月 1 ～ 2 人の県内の作家を紹介しています。特別展や企画展ではなかなか御紹介できない作家・資料を展示するもので、平成 22 年度は「追悼三浦哲郎」「陸羯南と素晴らしき仲間たち」などのタイトルで 18 人、平成 23 年度は「北村小松新収蔵資料」「追悼獺不次男」など 13 人について展示しました。

6 月は庄司力蔵と川島雄三を紹介しています。

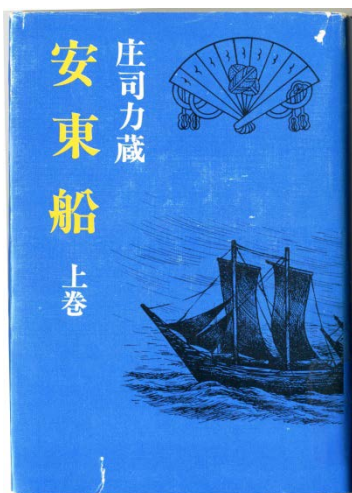
これまでの展示については、[HP「今月の作家コーナー」](#)で御覧になれます。

☆庄司力蔵

庄司力蔵は、大正 15(1926)年にむつ市で生まれた作家です。小学校卒業後、進学のため上京。終戦後は下北に戻り弘前大学を経て小・中学校の教員になります。昭和 24(1949)年、毎日新聞主催の懸賞小説に「一刻への哀願」が入選、昭和 37 年には「羅城恨」が朝日新聞懸賞小説で佳作に、昭和 40 年に「靄と渚」が第九回東奥小説賞に選ばれ、選者の石坂洋次郎から「洗練された心理描写」と評されました。

庄司は俳句への造詣も深く、昭和 22 年に畑中秋穂らの俳句結社「蘆光」に、昭和 28 年からは青森俳句会「暖鳥」(寺山修司も参加)に参加。

昭和 42 年、黒岩重吾のあとを受け、東奥日報に「安東船」の連載が始まります。これは、室町時代の青森を舞台に、十三湊を拠点とする安東氏、下北の蠣崎氏、南部氏らの盛衰が、三人の女性の生き様とともに描かれる雄大な歴史ロマンで彼の代表作となりました。昭和 54 年には、元禄時代の八戸を描いた「想う如く」がデーリー東北に連載されて人気を博します。この他、郷土文芸雑誌や地元新聞に小説、エッセイなど多くの作品を発表。下北で粘り強く作品を生み出し続けてきた彼は今、郷土を代表する作家として揺るぎない評価を得ています。



庄司力蔵『安東船』



今月の作家コーナー

こんな レファレンスがありました



(第13回)

本年5月21日、日本では932年ぶり、平安時代以来の広範囲にわたる金環日食に日本中が熱狂しました。青森県で見ることができたのは部分日食でしたが、予報どおりの好天に恵まれ、皆さんもご覧になったのではないのでしょうか。

日食・月食の予測は古くから行われていました。現代では、高い精度の予報があるため、明日は雨か晴れかと考えることもさほどありませんが、昔の人たちは「月に暈がかかると、曇りや雨」といった天気の詳細（「天気俚諺くてんきりげん」と言います。）をしながら待っていたのかも知れません。

今回はこの「天気俚諺」と「釣り」の本を書いたお殿様のお話です。

【質 問】 日本最初の釣りの本を書いたのは、津軽のお殿様だと聞きました。
どんな殿様が書いた、なんという本ですか。
現代語訳されて読むことができる本があったら読んでみたいのですが。

【回 答】

海に囲まれた日本では、貝塚から出土する魚骨や『古事記』の海幸彦・山幸彦の話に伝わるように、生活のための漁が古代から行われてきました。

平安時代には、貴族が遊びとしての釣りをしていたことが『蜻蛉日記』『源氏物語』などに書かれています。一方『宇津保物語』では、困窮した子どもが、食べるものを求めて釣りをします。

遊びとしての釣りが庶民へと浸透していくのは、釣堀までつくられ、大繁盛したと言われる江戸時代に入ってからです。

その江戸時代、享保8（1723）年に『河羨録（かせんろく）』という本が書かれます。上中下巻のこの本が、日本最古の釣りの専門書と言われているものです。

書いたのは、陸奥国黒石藩第三代藩主津軽政兎（凹の下に儿 - まさたけ）です。

政兎は、寛文7年6月10日第二代藩主信敏の嫡男として江戸で生まれました。幼名は万吉、信房、信全、采女、天和3年12月に家督を相続。交代寄合格となり、本家の弘前藩主・津軽信政から偏諱を受け、「政兎」と名乗ります。

貞享3年、政兎19歳のときに迎えた室、阿久利姫は吉良義央（上野介）の三女で、元禄15年の赤穂事件の翌朝、吉良邸に真っ先に駆けつけたことが当時の記録『浅吉一乱記』（国立国会図書館蔵）で伝えられています。

さて、『河羨録』の内容を、冒頭の「鉄砲洲より芝品川まで春キスの部」で紹介しましょう。

「～ まず、鉄砲洲から御船蔵までの間、浜御殿前から沖は食わないことがあり、または佃の角から札場までの間は、キスはすばらしく大きいというので、ここばかり釣る人もある。佃の角を南へ、松平安芸守浜屋敷前までの内によい洲があつて、他の並みの場所よりは食うことがある。 ～」

このように上巻では、江戸湾のキス釣りを、釣り場ごとに詳細に解説しています。江戸前釣り指南書、現代では“東京湾釣りガイド”といったところでしょうか。

中巻は、季節・天候による釣りうん蓄

「～ 春キスは、四月の季節に入り、または八十八夜を過ぎて四、五日あるいは十日過ぎてから食いが立つという。八十八夜より霞原の雀が鳴きだすのを合図に食い始めて六月土用に入って雀が鳴きやむとキスも、食いやむという説がある。～」
 天気予想「天気俚諺」

「～ 星 さえ過ぎて、余りきら、きら、きらめくと翌日は風が吹く。

山 富士山の後を雲が去って行くと、必ず暴風となる。」

下巻では、釣具や餌などについて書かれています。

釣具については、仕掛けや浮、釣針など巧みな絵で描かれています。

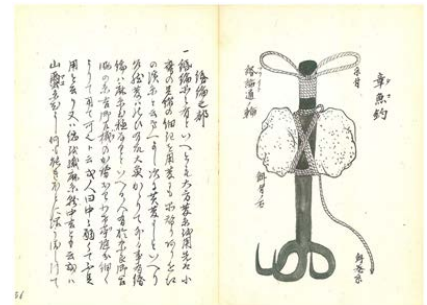
このような釣り指南書を書くためには、さぞや釣り三昧、釣り道楽であったろうと思いますが、小藩とはいえ藩主にそのような時間があつたのでしょうか。

津軽采女は將軍綱吉の御小姓を御役御免になり、非常勤である小普請組になったばかりか、義父吉良上野介の事件で出世を絶たれて暇であつたことは確かなようです。

実際、この『河羨録』の序文文末では、

嗚呼釣徒楽一釣絲外也利名輕一釣艇内也

生涯淡快澹無心屢避塵世則仁者靜智者樂水豈其有他乎



『河羨録』の仕掛け針の図

ああ、釣りをする者の楽しみの一つは釣ることの外（ほか）にある。

利益・名誉なことは重要ではなく、もう一つの楽しみは釣り船の内にある。

私は一生、物事に執着せず無心でありたい。

煩わしい世間は避け、仁の心をもつ者は静かに、

知恵のある者は釣りを楽しむのである。

どうして、こんな楽しみが他にあるのか。決してほかにはない。と結んでいます。

寛保3（1743）年1月25日死去。享年77歳。

采女の人生が、序文のような人生であつたと願っています。

『河羨録』は現代語訳になっています。（釣り文化協会 昭和56年発行）

【注】※1 上記で参考とした『河羨録』は、国立国会図書館所蔵本によります。

①『河羨録』は、写本によって標題の字が「河」ではなく「何」を用いて『何羨録』となっているものもあります。

②『何羨録』の巻号と内容は、写本によって差異があります。

水産総合研究センターでデジタル化し、公開しているものは、天候に関するものが第3巻となっています。

※2 津軽政児の「まさたけ」という読みは、「まさとら」とも読まれています。

【参考資料等】

『青森県人名大事典』東奥日報社 1969年

『源氏物語』『うつば物語』小学館 新編古典文学全集

『黒石城下誌』藩祖津軽信英公分知350年記念誌編集委員会 黒石神社崇敬会 2008年

『河羨録・通機図解・民用晴雨便覧』江戸科学古典叢書22 恒和出版 1979年

『魚紳士録 下巻』木村重著 緑書房 1994年 他

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室

電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介 (第13回)

「児童書」と聞くと、どんなイメージを持っていますか。多くの人は「児童書＝子ども向けの本」というイメージを持つのではないのでしょうか。

しかし、最近では一般小説を書いている作家たちが、絵本や小説などの児童書を手がけています。彼らの描く児童書の世界は、どんなふうになっているのでしょうか。

『わるいことがしたい!』

沢木耕太郎／作 ミスミヨシコ／絵 講談社 2012
(児Eミミヨ A05B)

つぎからつぎへと、わるいことをしている、いたずら好きのおとこの子。こんどは、どんなわるいことをするのか。

「おもしろかった」ってきいたら、「うん」だって。



『いるのいないの』怪談えほん 3

京極夏彦／作 町田尚子／絵 東雅夫／編 岩崎書店
2012 (児Eマチダナ A05B)

ぼくは、おばあさんのいえでくらすことになった。

おばあさんのいえは古くて、天井もとても高い。

天井の暗がり気になった、ぼく。ある日、上のほうをみていたら…。

※「怪談えほん」のシリーズは、1～5巻出版されています。

(2012年5月15日現在)



『少年弁護士セオの事件簿 1 なぞの目撃者』

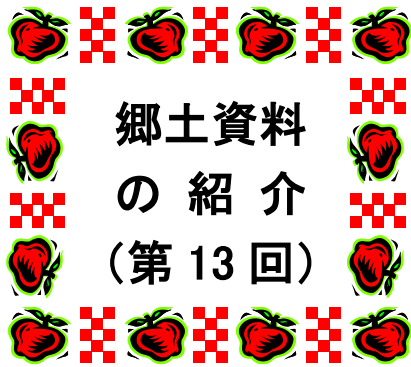
ジョン グリシャム／作 石崎洋司／訳 岩崎書店 2011
(児933Jグリシャジ (1) A09A)

『法律事務所』『ペリカン文書』など、数多くの法廷ミステリーを発表してきた著者が初めて手がけた児童書です。

この本は、40以上の言語に翻訳されています。また、続巻も出ていますので、シリーズでお楽しみください。



いつも児童書を読んでいる人も、児童書を手にとってみたことがない人も、ぜひ、手に取ってみてください。きっと、ひと味違う作品に出会えると思います。



郷土資料 の 紹 介 (第 13 回)

昨年9月、詩人・文芸評論家の坂口昌明氏(1933～2011)が78年の生涯を閉じました。

生まれも育ちも東京の坂口氏は、旧制弘前高校出身の詩人・中国文学者、小山正孝(1916～2002)に師事した縁で「みちのくの世界」を知り、「生涯に二度とないショックを受け」(竹森茂裕「坂口さんが発見した『津軽』『陸奥新報』2011/9/11」)たといいます。

生前「『津軽』という場所は、世界史的、地政学的に見ても、世界を揺るがすような文化の生まれる場所」(同上)だと語っていた坂口氏は、地元青森ですら忘れ去られようとしていた「みちのくびと」の文化を、生涯をかけて掘り起こし、語り続けました。

坂口昌明氏のご冥福をお祈りするとともに、追悼の意を込めて、今回は**青森に関する坂口氏の主な著作**をご紹介します。

『お岩木様一代記 付おしら祭文十六ぜん様』(坂口昌明編 津軽書房 2010)

元禄時代に津軽で女語りされた「お岩木様一代記」と、オシラ祭文「十六ぜん様」。柳田國男に師事した竹内長雄(1911～1944 青森市出身)が1931(昭和6)年に女鹿沢村(現青森市浪岡)のイタコ桜庭スエ(1899～1934)から採録した貴重なこれらの原文に、現代語による対訳と詳細な解説を付す。

『みちのくの詩学』(坂口昌明著 未知谷 2007)

福士幸次郎・高木恭造から無名の地方詩人とされる人々まで、1920年代から活躍した津軽と南部の詩人約20人を取り上げ、その軌跡と文学的意義をさぐる。

『上磯風聞志』(斎藤吉彦著 坂口昌明解題 緑の笛豆本の会 2000)

柳田國男や折口信夫に将来を嘱望されながら夭折した民俗学者・斎藤吉彦(1904～1930 弘前市出身)。彼が1928(昭和3)年8月に外ヶ浜一帯を巡って民俗調査を行った際の幻のメモを、豆本としてよみがえらせたもの。

『お岩木様一代記』と『みちのくの詩学』は貸出可能です。また、『上磯風聞志』は貴重資料庫に保管しており、館内閲覧が可能です。ご希望の方は当館職員にお申し出ください。

なお、2007年1月から坂口氏が亡くなる直前まで『陸奥新報』紙上に連載されていた「岩木山奇談集」は、『安寿 お岩木様一代記奇譚』として2012年9月にぶねうま舎から刊行予定です。



青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様幅広くご利用いただいております。

このコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段はあまり人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

近代文学館資料の紹介(第13回)

鳴海完造サイン帳と秋田雨雀草稿

青森県近代文学館では、7月14日から9月9日まで、秋田雨雀没後50年にあたって、ロシア文学者鳴海完造の遺した資料を中心に、特別展「鳴海完造と秋田雨雀」を開催します。今回は、展示資料の中から2点を紹介します。

① 鳴海完造サイン帳

黒石に生まれた鳴海完造は、1927(昭和2)年にソ連革命十周年記念祭に招かれた秋田雨雀に随行してソ連に渡り、雨雀の帰国後も9年間ソ連に滞在し、プーシキン研究者として貴重な図書を多数収集しました。



鳴海完造旧蔵のサイン帳と
ショスタコービッチのサイン



このサイン帳には、ソ連滞在中から帰国後にかけて、鳴海が出会った、チェーホフの妻で女優のオリガ・クニツペルや、フランスの作家アンリ・バルビュス、近衛秀麿など、20名余のサインが記されています。なかでも、音楽家ショスタコービッチのサインには、楽譜が添えられていて目を引きま

② 秋田雨雀草稿「盲詩人ワシリー・エロシェンコの話」

秋田雨雀の多彩な活動の一つにエスペラント運動があります。

そのきっかけとなったのが、盲目の詩人ワシリー・エロシェンコ(1889～1952)との出会いでした。1915(大正4)年、日本に亡命していたエロシェンコのもとを訪ねた雨雀は、「世界を一つのことばで結ぶ」国際語・エスペラントを知りました。この時のことを「人生を別の眼で見る事が出来た。そしてたくさんの仕事は私の前に現われて来た」と書いています。

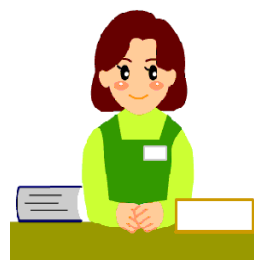
この草稿は、昭和28年、NHKの放送番組「趣味の手帖」のために書かれたもので、バラライカ(ロシアの楽器)を鳴らして淋しい聲で民謡を歌うエロシェンコの姿が描かれています。



草稿「盲詩人ワシリー・エロシェンコの話」

カウンターから一言 (第13回)

24年4月から**図書館ボランティア**の方々の**資料配架活動**が始まりました。



資料配架活動とは？

返却された資料を、書架の正しい場所に戻したり、書架を整理する活動です。当館専用のエプロンを着用して、祝日を除く月曜日～金曜日に活動しています。現在は、17名の方が資料配架ボランティアとして登録しており、楽しく熱心に活動しています。



ある日の活動の様子



2時間があっという間に過ぎた。返す本の場所を探し疲れると本の方からささやいてくれる。自分の借りたいと思う本にも出会える素敵な空間である。

(ボランティアの声)

また、6月9日から**利用案内活動**も始まります。

利用案内活動とは？

来館された方々から、図書館の利用について質問があった場合などに、わかりやすくお答えするインフォメーション的な活動です。上記と同様に専用のエプロンを着用して、祝日を除く土・日曜日に活動します。

当館では、ボランティアの方々のご協力をいただきながら、よりよいサービスの提供に努めて参ります。

なお、貸出・返却、登録に関する手続きや資料検索サービスなどの対応は職員が行っていますので、お気軽にお尋ねください。

これからも、皆様のご理解とご協力をお願いします。



編集後記

県立図書館では、約88万冊の資料を所蔵しています。そのうち約15万冊を一般閲覧室などに配架しています。

今回ご紹介した「青森県立図書館の団体見学」では、いつもは入ることのできない書庫に保管している多くの本を見ることができますので、皆様のご利用をお待ちしております。

また、近代文学館では、7月14日から特別展「鳴海完造と秋田雨雀」を開催しますので、ご来館をお待ちしております。